〈書評〉

帆刈浩之『越境する身体の社会史 ―華僑ネットワークにおける慈善と医療―』

福士　由紀

一九世紀後半、鉱山開発や鉄道敷設、プランテーション開発など植民地開発に伴う労働力需要により、多くの中国人労働者が海外へとわたった。本書は、こうした海外移民の生と死を支えた中国人社会の仕組を、慈善や医療といった側面から検討するものである。

本書は以下のような構成となっている。

はじめに
第一部　東華医院と華人ネットワーク
　第一章　香港における近代医療の展開
　第二章　香港東華医院の慈善活動

第三章 東華医院の海外ネットワーク
第四章 疫病流行と中国社会
第二部 中国医学をめぐる「近代化」の諸相
第一章 科学と民族主義の時代：民国初期における中国医学廃止をめぐって
第二章 中国医学の国際化と現地化
第三章 香港における中国医学の制度化
おわりに

以下、各章の内容を紹介する。

「はじめに」では本書の二つの課題が示される。海外へわたった中国人労働者たちの生活を支えるのに大きな役割を果たしたのは同郷組織などの慈善団体であった。本書の課題の第一は、移民の主な出入港の一つであった香港に一八七〇年に設立され、今なお現存している東華医院の諸活動をネットワークという視角から検討することを通して、海外移民を生み出し続ける中国人社会の秩序のあり方を考察することとされる。また、移民にともない中国伝統医学も世界各地に広まった。本書の課題の第二として、近代から現代に至るアジア社会における中国伝統医学の展開をとらえることがあげられる。

第一部では、主として、東華医院の諸活動とそれを支えた広東人ネットワークの実相が検討される。

第一章では、一九世紀半ばから二〇世紀初頭の香港における医療・衛生事業の展開が示される。英国は香港を植民地化するとただちに疫病などの衛生問題に直面した。香港政庁による医療・衛生事業は当初は中国人社会への分離統治を基調としていたが、一八八〇年代頃から変化した。当局による中国人の生活空間への干渉・管理が強化される一方、衛生事業への参与を通した華人の発言権の拡大が見られた。また、本章では、一九世紀後半の西洋医学内部の変化と、西洋人

医師の中国に対する眼差しの変化も検討される。

第二章では、東華医院の設立経緯、組織形態、慈善活動の実態が検討される。東華医院は香港中国人社会の医療・衛生問題に対処するための組織として一八七〇年に設立された。その運営母体は、広東人としての同郷結合を原理とする同業ギルドの連合体であり、その意味で東華医院は広東人による同郷会館とも見なすことができると指摘される。東華医院は中国人社会に中国伝統医学による診療を提供する以外に、難民収容・資遺回籍、助葬、災害救済、義学・託児所・養老院経営などの活動も行っていた。本章では、香港や中国大陸における災害救済活動から、東華医院と香港政庁、清朝政府・広東善堂との関係が検討され、香港華人の商業ネットワークを背景に東華医院が政治力を発揮していった様相が描かれる。

東華医院の慈善活動は海外華人に対しても行われた。第三章では、東華医院による海外での慈善活動の実態、海外の広東人コミュニティとの関係が検討される。海外で客死した華人の遺体・遺骨を故郷へと移送する運棺は、東華医院の主要な活動の一つであった。本章では、東南アジアや北米に広がる運棺ネットワークの実態が解明されるほか、関東大震災の際の被災華人の救済や、東南アジア華人社会に中国伝統医療を提供する華人医院の活動においても、東華医院を中心とする広東人ネットワークが利用されていたことが示される。海外華人の出稼ぎ・商業活動では、同族・同郷的紐帯は有効な社会資源であり、移民の生死を含む生活全般の支援に、同郷慈善組織は尽力した。本章ではまた、東華医院の活動を支えた華商の交際活動の分析を通して、慈善とビジネスが表裏一体の関係にあったこと、すなわち運棺を含む種々の慈善活動は、移民の労働力としての価値の低減を防止するために工夫された社会システムであったことが指摘される。

一九世紀末から二〇世紀初頭、疫病の流行を背景にアジア社会においても衛生行政の制度化が進められた。第四章では、一九世紀末、上海で起こった四明公所事件の分析を通して、租界当局による公衆衛生の要求が結果として上海から寧波への運棺を促進したこと、四明公所を中心とした運棺ネットワークの実態およびそれが同族・同郷的紐帯を利用し

た出稼ぎ経路と一致することなどが解明される。香港の東華医院も、香港政庁による衛生の制度化や中国大陸からの政治的ナショナリズムの香港社会への影響の拡大の中で、その活動や香港社会における位置づけを変化させた。一八九四年のペスト大流行を契機に西洋医学を取り入れ、清朝政府や革命派からの影響を回避し、香港社会における自らの政治力を慈善という領域に特化するなどの自己変革を行うことで、東華医院は慈善を通じた華人ネットワークを維持し、内外の華人社会の生活支援を続けていくこととなる。また、本章では、東華医院による西洋医学導入後も、中国医学は否定されたわけではなく、依然として香港中国人社会の医療・衛生事業に大きな役割を担ったことも指摘される。

第二部では、中国人の海外移住に伴い各地に広まった中国伝統医学が、「近代」に対応してどのように変容を遂げてきたのかが検討される。

近代期、西洋医学の中国への流入・普及に伴い、中国医学廃止論がたびたび提起された。第一章では、一九一二年、北京政府教育部により公布された「中華民国教育新法令」内の医薬教育分野に、中医薬に関する項目が含まれなかったことに対して、神州医薬総会など中国医学界が行った抗議・請願の内容が検討され、当該時期、中国医学界は西洋医学や政府への抗争というよりはむしろ、ナショナリズムや「科学」概念に対応すべく自己変革を行おうとしていたことが指摘される。この自己変革＝「科学化」・「近代化」の努力は近代期を通じて続けられていく。

第二章および第三章では、大陸中国、マレーシア・シンガポールを中心とした東南アジア、香港での、戦後から近年に至る中国医学の展開が検討される。大陸中国では、共産党政権の下、中国医学は西洋医学と並んで正規の医療体系としてとり入れられ、一九八〇年代以降は、近代科学による中医薬の特性の証明といった「科学化」や、各国の中医薬団体との交流などの「国際化」が進められている。一方、東南アジアや香港では、中国医学は正規の医療体系にはいれられず、基本的には民間で継承されてきた。戦後から一九七〇年代、大陸中国との関係が途絶えた時期には、中医師の現地養成が行われ「現地化」も進行した。しかしこれらの地域でも、一九八〇年代以降、伝統医学の見直しや中医薬ビジネスへの関心などを背景に、政府主導による中医薬の制度化、大陸を含む中医薬界の交流の深化といった国際化が進展している。

あるいは価値転換してゆくのかといった問題に直面していると指摘する。

「おわりに」では、地縁組織や中国伝統医学などの伝統知、香港中国人社会の歴史的個性としての越境性およびそれを支えるネットワークといったキーワードに基づいて本書の内容がまとめられ、更に今後の課題としてエコロジカルな視点からの医療社会史研究の必要性が指摘される。

本書は、著者の学位申請論文に、その後新たに発表された論考を加え、まとめたものである。一九九〇年代半ばから二〇一〇年代はじめにおよぶ著者の研究成果が網羅されており、非常に内容豊かで、論点も多岐にわたる。華人・華僑史、移民史として本書を読むことも可能であろうが、評者は本書を、同郷団体・慈善組織に着目した中国社会史研究であると同時に、中国伝統医学に焦点をあてた医療史研究として読んだ。

同郷団体の慈善活動に着目した中国社会研究としての本書の大きな特徴は、国家を相対化し、民間社会内部の秩序のあり方を追求した点である。中間団体を通して中国社会を考察する研究は、戦前期からの蓄積があり、一九八〇年代に再び関心が集まった分野であるが、その多くは近代国家の基礎としての中間団体や、国家に対抗しうる「市民社会」の形成問題など、国家との関係を重視（二一―三頁）する傾向があった。こうした中で、本書は、東華医院の諸活動を通して、広東同郷という結合原理を機縁としながら、「個人や団体、国家などが相互に必要に応じて結びつく」社会のかたち（三頁）を描き出す。本書を通して、国家という枠組みに必ずしも強くしばられずに動く人々と、彼らが形成する社会のありようが鮮明に見えてくる。また、こうしたありようは、海外移民を多く輩出した広東人社会だけでなく、第三章で検討される四明公所の事例にみられるように、明清期以来の商業の発展にともなう都市化と国内移住の活性化の中で形成された中国民間社会の生存戦略との連続性をもつものでもあったことを示したことは意義深い。

これを可能にしたのが、豊富な史料群とユニークな手法である。本書では、東華三院文物館所蔵文書、四明公所碑文

拓本、バンクーバー公文書館やウェルカムライブラリー所蔵資料などの膨大な史料群により、東華医院や四明公所といった同郷団体の諸活動、近代香港社会・中国社会の様相が実証的に解明される。とりわけ、書簡史料の分析により、民間社会における人々のつながり（ネットワーク）の具体像をあぶりだす手法は本書の中で非常に有効にはたらいており、歴史研究の面白さを改めて感じさせられた。

また、死や疾病、生きるための就労や移動という問題を、身体が経験する一連の事象として連続的にとらえ、描き出したことも本書の大きな特徴だといえる。従来、これらの問題は個別に切り取られ、疾病史やその対策としての医療史、移民史や人口移動史といった視角から個々に検討されることが多かった。こうした中で、本書は生と死の双方を支えた民間社会の仕組を検討することにより、同郷団体や慈善組織の活動実態だけでなく、近代期における中国人移民たちの生活のありようをも照らし出す。

民間社会の重視という著者の立場は、医療史研究としての本書の特徴にもあらわれている。第二部の冒頭において指摘されているように、従来、近代中国医療史は近代医学の視点から叙述されることが多かった（二七二頁）。これは、主として、医療や医学、公衆衛生といった問題を通して中国社会における近代性のあり方を検討しようとする問題意識によるものであり、近代医学や公衆衛生の国家による制度化の問題、これらの導入による社会変化などが、多くの研究者により検討されてきた。一方、民間社会を視野に入れた場合、近代期、人々にとって中国伝統医学は依然として重要な医療技術であった。本書はこうした側面に着目し、これまで近代医学の流入の中で衰退していくものとして描かれることが多かった中国伝統医学を、その自己改革の努力や今日までの継続性を跡付けながらポジティブに描き出す。特に、中国大陸だけでなく、東南アジアや香港など海外の中国伝統医学の今日に至るまでの展開を跡付けた点はアジア医療社会史研究として大きな意義がある。Liping Bu and Ka-che Yip eds., *Public Health and National Reconstruction in Post-War Asia* (Routledge, 2015) の刊行に見られるように、近年、戦後アジアの医療史への関心は高まっている。こうした中で、本書が国家医療（State Medicine）という枠に必ずしも包摂されなかった伝統医療の歴史的継続性、重要性を示したことは大

きな意味をもつ。

以上のように、本書は中国社会史研究としても医療史研究としても非常に有意義な成果であるといえる。ただ、本書を通読する中で若干の違和感を覚える点もあった。それは第一部と第二部における分析視角のギャップである。第一部においては、慈善や医療が、担い手やその活動だけでなく、受け手を含め総体的にとらえられるのに対し、第二部は主として医療の担い手に焦点があてられている。近代から現代にかけて、中国伝統医学・医療が中国大陸のみならず、海外の華人社会でどのように需要されたのか、多元的な医療資源がある中で人々の医療をめぐる選択には歴史的変化があったのか、あったとするならば、それは何に基づくものなのか。医療の受け手も含め総体的に身体をめぐる事象を考察することは、本書の課題であると同時に、医療社会史研究上の課題であるといえよう。

また同じく研究史上の課題をもう一点指摘したい。本書第一章で指摘された西洋医学内部の変化が外国人医師の中国社会への眼差しの変化につながるという議論は非常に興味深く読んだ。眼差しの変化は、実践としての医療や公衆衛生政策にどのように現れたのか。また、こうした眼差しの変化は被植民地エリート層にも共有されたのか。より広範に社会化されたのか。こうした点を念頭に、医療・衛生事業をはじめとする身体をめぐる様々な事象を検討することで、科学と社会、医療・衛生と社会との関係をより深く理解することが可能となろう。

以上、評者なりの理解に基づき、本書の概要およびその意義、課題について記した。評者の力不足により本書の魅力を十分に伝えきれていない点もあろうが、本書は「身体」を切り口に中国社会史、医療史、華人・華僑史をつなぐ良書であり、様々な分野の研究者にとって刺激的な知見が提示されている。本書が多くの分野の研究者に読まれることを期待する。

【付記】本書評は、二〇一六年一一月に開催された「メトロポリタン史学会・第四回若手研究者の集い」での報告をもととしている。当日は著者にもご参加いただき、報告に対する応答をいただいた。感謝申し上げたい。